

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成23年1月5日発行(毎月5日1回発行)
第51巻1月号(通巻618号)

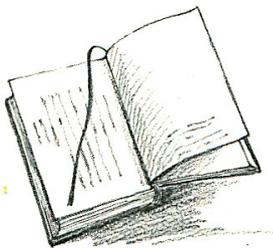
風土



冬
桜
神蔵
器

十 三 束 三 伏 放 つ 初 日 かな
年 明 くる 茅 葺 屋 根 の 厚 庇
初 霜 や 使 ひ 勝 つ て の 竹 箒
綿 虫 に 先 を 越 さ る る 墓 前 かな
笹 子 鳴 く 生 命 線 を て の ひ ら に

止め石に縄の十文字小春かな
千年の仏と燃ゆるつるもどき
霜下りる午前三時の月明に
神官の階降りて来る冬桜
佐助やぐい呑一つ形見とて
悪人になれず十一月六日
ときじくのかぐのこのみは右近とぞ



竹間集

同人作品



後の月

橋添やよひ

カタカナの八雲の手紙小鳥来る
剥落の絵馬堂色なき風の中
萩刈るも括るも乾く音の中
深みゆく秋の七野の檀那寺
利休自筆掠れもるとも曝涼す
四十四万カンデラ灯台秋燕忌
後の月太平洋に雫して

かるやかに

南 うみを

片足は大鯉のうへ松手入
溝蕎麦のふるへる杭をうちにけり
あたらしき檻毘秋草に降ろす
熊除けの鈴腰に鳴る畝づくり
蓮は枯れ亀は甲羅を干しにけり
かるかやのいとかるやかにかるかな
刃こぼれの剣かざしぬ里神楽

一巨船

島谷 征良

おとろへぬ暑さの中の秋蚕かな
台風のそれたる沖に一巨船
蝸螂のもの食ひ終へし貌ねぐふ
藁その他やたら飛びゆく芋嵐
雁渡し友いくたりも病床に
いちはやく夕来てをり萩の花
鶏頭の影もゆたかに子規忌かな

みちのくの

大竹 淑子

山の端にかかる彩雲蛇笏の忌
薄紅葉して曝涼の大徳寺
広縁を踏みし軋みや暮の秋
閑趾奥州勿来庵註 二句に且つ散る桜紅葉かな
脇道へそれてぬすびと萩は実
灯台を揚げば沖や鳥渡る
みちのくの潮にかがよふ後の月

小鳥来る

宮川みね子

小鳥来る万葉集の講座かな
エレベーター八階を出づ鱒雲
墓洗ふちちの山河の風の音
十月や米研ぐ音の三拍子
塩昆布の煮詰るにほひ障子張る
もてあます凶鑑の重さ秋しぐれ
野分過ぐ大きな星の一つ出て

常神岬をゆく

浜 福恵

舟屋根の藁繕はれ雁の空
あけくれの潮のひびきに海桐の実
終点のコスモス低し岬バス
十月や烏賊干す風のひらひらと
北限の千年蘇鉄秋高し
常神の雀は銀の蛤に
秋さぶし遊子の浜に石拾ふ

朝 寒

鈴木とおる

明史なき舞鶴遠し赤のまま
同級生一人残りて盆送る
一と駅を歩く花野を通り抜け
餅米の田に集まりて稲雀
屋上のかくれ煙草や夜学生
三度訪ふ霞城趾の菊人形
朝寒のくろがね耕地に煙立つ

神の御名

— 島谷 征良 —

坂の上の大きな寺より除夜の鐘
海に入る河をも染めて初茜
遊行寺の宝物館の淑気かな
銭洗ふ列の長さよ初詣
年賀状教へ子にまた子が増えて
読初や賑々しきは神の御名
数珠握りしめ初泣きとなりけり
一点の雲もあらずに寒の入
七草がすみ淡々と月日過ぐ
紅白の白のおくるる寒牡丹

山河集

同人作品



神蔵器選

御耳に夕べの冷えや阿弥陀堂 浅田 光代

初鴨や池の浄土に着地せり
鳥渡る空に高さのありにけり
行く秋の海の心音聴いてをり
月までの道ついてゐる渚かな

筆とれば文字の片寄る十三夜 山本 浪子

ざくろの実一カラットの甘さかな
ヨットより電話をもらふ秋日和
身に入むやモーツァルトの父の文
狩衣の浄衣のはらむ秋の風

大空の奥なる運動会の声 根岸 善行

真つ白な函館駅舎七竈
晩秋へスーパーひたち十一号

塩屋増灯台

枯 蟻 躡 く 第 百 参 段 目
菰巻いて蝦夷坂東を分かち立つ

屋の虫鳴くや古刹の石の塔 石川 友江

秋うらら寺に瓦のコレクション
草の穂がくすぐる夫婦道祖神
霧まとふ三笠ホテルのシャンデリア
朝露を拭はれリフト動き初む

竹伐つて曳き出せば地に竹匂ふ 生田 作

ゆきあうて退職教師大豆干す
大藪に日のこまごまと雁渡し
木犀の黄金こぼるる長屋門
ななかまど峽の奥まで陽の届き

風土賞作品

日々の水

柿沼盟子

坂にたつ店の水平ソーダ水
山滴るスイッチバツクの信号所
夜に入りて二声太き秋の蟬
枝豆を平らに冷まし夕支度
半日で建ちし御旅所秋高し
木犀や近くて知らぬ径めぐり
塞^せかれては澄みゆく水や神の留守
行き止まる水に走り根冬の鳥



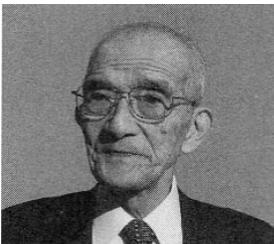
かうかうと灯す境内神の留守
幾何学模様詰めて澄みをるおでん鍋
初荷とて折らずに届くゲラの束
ビル街の遠近ひびく雪催
水盤の水動かざる冬座敷
富士に吹く風の見ゆるや寒夕焼
げんまんの指こそばゆき花ミモザ
鴨引きてさざなみ途切れとぎれかな
ふらここを降りてチョコレートネ買ふ
考へる時運びゆく春のバス
葉桜やとてとて走る二歳半
出前あげ待つとどんぶりや大南風

新人賞作品

洛中洛外

西村雪園

祇園会や一の籤とる占出山
天王山は大夕焼けの中に在り
南座を出て下河原秋の風
どんぐりや去来三百六回忌
遊亀の絵に遇ふ晩秋の美術館
もみぢ寺下乗石より三百段
北側は冬日の当たる八坂まで
一力の赤の漆喰十二月



古義堂の書庫の黒松初日射す
初比叡の峰越えてきし昼の月
寒明けや軒に出したる古床几
また赤の似合ふ歳なり梅開花
つばくらめ間口の広き絹問屋
頂近き風の甘さや青き踏む
夜桜や至福のときの人ばかり
チューリップ一行書の言ひ残し
新緑や貴船鞍馬は一本道
緑陰や公家の名残りの破風門
見下ろせば洛中洛外梅雨の色
夏座敷広げる鉾の設計図

新人賞作品

五月の風

雨宮桂子

冬に入るそびらに大仏殿の鴟尾
かはたれの奈良はむらさき冬来る
枯菽や円舞のごとく伐折羅立つ
伏見より来て満願寺たうがらし
煌々と満月のゆく去年今年
一月の庭より風の歩き出す
曼荼羅のひとつひとつに牡丹の芽
山の辺の道のはじめのよもぎ餅



菊坂や路地一本の春隣
巡礼の村や菜の花蝶と化す
耳たぶの大きほとけやわらび餅
山越しの円空仏や朴散華
短夜の分婁室の丸時計
産声を上ぐ泰山木の第一花
赤ん坊五月の風を握りしむ
六月や赤子のかかとまんまるし
妻入りの北国街道木槿咲く
底紅や町家の奥の桜皮細工
いなご跳ぶ畔を三尺川流れ
行く秋や北向観音片参り

冬の家猫

森屋 慶基

◇特別作品◇(抄)

北海や松のまとへる風の色
潮の香の抜くる干網空澄めり
複眼に海照り返す赤とんぼ
うすうすと鳥海山や菊を摘む
草の丈均す朝露まとふたび
残菊の脛を風梳き市終る
突堤に黝き波寄す十三夜
甕の口包みて寝かすにごり酒
板垣に囲ふ一畝ブロッコリー
波の刃の間合ひ読み切る冬の家猫

風土独語／神蔵器



蛤となる相談に雀群れ

安永 圭子

季語「雀蛤となる」に由来した句である。歳時記によれば、九月の第二候。中国古代の天文学にもとづく七十二候によるとあり、とくに雀の羽根の色と蛤の色に似通うものがあるところから、このようにいわれた、とある。

雀だけでは季語にならないが、新年の初雀をはじめ・春の雀・雀交る、雀の子、雀の雛、親雀、黄雀（雛の口黄なるもの）秋では稔の稲田に群れる雀を特に稲雀と言ひ、奥州に流されて死んだ藤原実方の霊がすずめになつて内裏にはいり食物を荒らしたという入内雀。寒中の雀は寒雀、さらに雀を使つた季語に雀の帷子、雀の鉄砲、雀の槍、雀の稗、雀の枕などあり、近年では「雀隠れ」などもしばしば使われている。

掲出句は作者の庭先でもあろうか。秋風が身に沁む頃になると、いつも見馴れた雀たち、おそらく家族や縁者でもあろう、次第に一つにかたまつて、それ荒寄り添うように群を作っている。「寒くなつたねえ、そろそろ海へ行こうか」「いやだ、いやだ、もつと遊んでいたいよ」今年生まれた一年坊主のすずめは元気がいい。

なお、この季語は寛文、元禄の頃にはすでに定着していた。今

日なお生き続けているのは、とんでもない空想でも、この季語の滑稽、俳諧味は人々に共感され、誰も否定出来なかつた。されば「蛤となる相談」をしている雀も、今日を生きる新しい季語としてもおかしくはなからう。

ざくろの実一カラットの甘さかな

山本 浪子

カラットは主として宝石の質量を表わす単位である。他に金の純度を表わす単位でもあるが、金の場合、純金は二十四カラット（九九・九%以上）、十八金は二十四分の十八（七五%）であるが、一般にカラットはあまり使われず、もつぱら宝石関係に使われているようである。

掲出句はざくろの実の甘さである。甘味にもそれぞれ程度というものがあるから甘味を表わす単位もあるかも知れないが、私は知らない。しかし、あつてもなくても一カラットの甘さとは、意表を突く傑出した表現である。

余計なことだが、一カラットのダイヤの重さは二〇〇ミリグラム。テンパー〇・一なら十ケ、〇・二なら五十ケ、さらに極小メレなら〇・〇一、百ケで一カラットである。現今、値は下がつているといつても良質の一カラットのダイヤは百万以上するであらう。

石榴は実が熟すと赤く裂け、肉の中に一杯種が詰まっている。食べると酸味がかなり強く甘酸っぱい。これぞ自然の味覚、神の恵みの甘さである。ダイヤの一カラットよりざくろの実の一カラットの甘さは尊い。（以下略）

風土集



神蔵 器選

横浜山下公園 三句

手入れ受く名は「はまみらい」秋薔薇
イーゼルを立てれば絵書き薄紅葉
蛤となる相談に雀群れ

横浜

安永 圭子

愛笑「ボ」二句

レントゲンに持病の二文字夜寒かな
冷まじや夫に命を譲り逝く
鯛雲書けばくづる一語かな
小鳥来る三時五分の花時計
きのふ逝きし友より手紙棗の実
逝きし友菊のかをりとなりけり
棺に菊入れても入れても喉渇く
蠅螂と托鉢並び門に佇つ
秋終るベルトの穴の一つ増え
青蜜柑通夜の廊下を転がれり

高槻

浅田 光代

川崎

豎山 道助

秋暑し三日続きの黒ネクタイ
風を見に道に出でけり秋の暮
看とりたる夫は花野の中に佇つ
星月夜涙を抱いて睡るなり
帯締めて花野の中に死ににゆく
桶の殖ひとつ転がる夕時雨
雁渡るランプ灯して夫を待つ
厨房の裏に蛸壺秋うらら
ゆるやかに海を目指せる鷹一羽
新幹線と平行に稲架組まれあり
蛇行して径交はらず芋嵐
深呼吸に終はる体操今年米
初焼の等間隔のうすけむり
歌枕ひとつ拾ひて秋惜しむ
灯台へ十段ごとの秋景色

札幌

岡山 真澄

東京

柿沼 盟子

川崎

山木 浪子